

メイド・イン・オキュパイド・ジャパン

「メイド・イン・オキュパイド・ジャパン」という言葉をお聞きになったことがありますでしょうか。当サロンでも時々取り上げていますし、最近では専門のコレクターもいます。これは「占領下の日本製」という意味です。今回は、この言葉について論ずることといたします。

1945年(昭和20年)に戦争が終わった時、日本の経済は壊滅的状況でした。何しろアメリカと中国という一位、二位の貿易相手と戦争した上に主要都市が空襲で破壊されつくしたのですから、十年前と比べると輸出入ともに三分の一以下にまで落ち込みました。しかもこれは金額単位の話でインフレ率などを考えますと実際は十分の一以下になっていたでしょう。

これほどまでに破壊された経済ですが立ち直りは意外に早く一ヶ月も経たない頃から、繊維産業は標準服、火薬メーカーは肥料、鉄工所は台所用刃物などと生活用品を生産するようになり一部は輸出して外貨を稼ぐようになりました。

ただしそれらは殆どが密貿易でした。というのもマッカーサー総司令部(SCAP/GHQ)は事前承認無しの輸出入を認めていなかったからです。しかしアメリカと旧ソ連との冷戦が皮肉な形で日本の経済を救うこととなります。日本を西側諸国の一員としたいと考えたアメリカは1947年(昭和22年)8月15日から対日経済政策を緩和して、制限付きではありますが民間貿易が再開されました。その時に義務付けられたのが(Made In Occupied Japan)の表示でした。

これが1951年(昭和26年)のサンフランシスコ講和条約により独立を回復するまで続けられていたと考えられている方が多いのですが、実際には意外に早く1949年(昭和24年)12月からは(Made In Japan)も認められるようになりました。そのため年代特定の判断材料になるとともに貴重品としてコレクター垂涎の的となり、これしか集めないという人もいます。

このオキュパイド期に輸出されたものの代表格は陶磁器ですが玩具も数多く輸出されています。初期の代表格が缶詰の空き缶を再利用したものです。

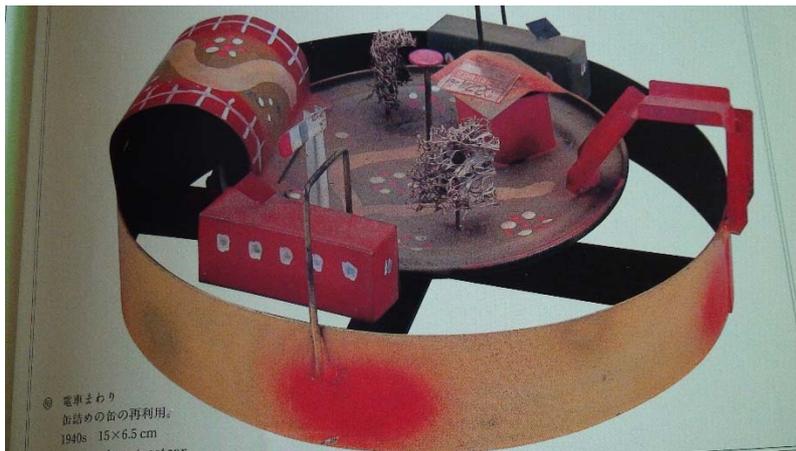
この時期におけるセルロイド玩具の代表格がパープー人形です。幼児言葉で「赤ちゃん」という意味ですが、元はと言えば米国製の少女人形でした。それを日本が模倣したのですが、日本は模倣するときに必ず改良を加えます。パープー人形も極彩色の羽をつけて竹や木の棒からぶら下げるといった改良を加えました。

その結果、年に70万個以上が輸出されるという大ヒット商品となりました。アメリカの遊園地で射的の景品とされていたとのことですが、子供達に大人気となりました。そして旧来からのイースター、ハロウィン、クリスマスなどのセルロイド玩具も好調で第一次大戦当

時の好景気が再来したといわれたほどでした。セルロイド玩具は 90%が葛飾、足立など東京で作られ輸出品の 95%が横浜港から海を渡りました。

これらのオキュパイドは先のサンフランシスコ講和条約以降は業者が一斉に、その部分を削りましたので貴重品となりました。もし機会がありましたら一つぐらいはお手元に持たれたらいかがでしょうか。

缶詰の再利用であるのが分かる電車の玩具



パープー人形

